



【被害者証言 2】黄阿桃（台湾）(http://fightforjustice.info/?page_id=1441)

1923 年、桃園県觀音郷に生れる。 連行年：1942 年

■看護助手の募集に応募してインドネシアへ

私が生まれた家は貧しく、学校にもろくに通えず、家事の手伝いをしていました。やがて台北に出て、萬華の日本人写真館で住み込みの飯炊きの仕事をしていました。

戦争（アジア太平洋戦争）が始まって、南方で働く看護助手を募集しているという広告を見た友人に誘われて、私も応募しました。文字が読めなくても雑用の仕事があるということで、1942 年の旧正月のころ、日本人の男女に引率されて 23 人の女の子たちと高雄から「浅間丸」でインドネシアに向かいました。船には大勢の軍人たち、そして日本人の女も乗っていました。

■バリックパパンの慰安所で兵士の相手を強制されました

セレベス島のマカッサルに着いて、しばらくその軍人宿泊所に滞在して、別の船でボルネオ島のバリックパパンに到着しました。着いてすぐから、連日激しい空襲があり、一緒に行った仲間の 3 人が亡くなりました。私は下腹部と目にひどいけがをして海軍病院で手術を受けましたが、子宮と右目を失ってしまいました。

退院すると、私は兵隊の相手をするのを強制されました。慰安所では、軍人は札を買って自分の買った女の子の部屋に入ります。砲弾の空き箱を並べて作ったベッドと椅子、テーブルだけの小さな部屋でした。最初に私の部屋に入ってきた兵士は、私が泣くのを見て何もしませんでした。その次に入ってきた兵士は酒に酔っていて、乱暴に私の身体に襲いかかってきました。血が流れ痛みを驚いておかみさんに言いつけに行くと、「だれでも最初はそうなるので大丈夫だ」と言われました。

私たちは毎月 1 回、軍医の身体検査を受けました。性病にかかっているかどうかを調べるのです。やってくる兵士の数はそれぞれの女の子によって違い、きれいで歌のうまい子にはたくさん来るのです。おかみさんが私に、「もっと客をとるように。1 日 20 人だ」と言うので、私が「それなら自分でやってみたら」と必死で言い返したところ、それ以上は言いませんでした。死にたいと思いましたが、いつか台湾に帰って両親に会いたいと我慢しました。

■1947 年によく帰国できました

1945 年 8 月日本が戦争に負けると、ウチたちは現地に取残されてしまいましたが、台湾同郷会の人たちの世話で、1947 年、2. 28 事件のときによく帰国できました。汽車は止まっていたので、牛車で故郷に帰りました。

バリックパパンでのことは他人に話すこともできず、ずっと独り身で働き続けましたが、38 歳の時遅い結婚をしました。夫は中国の田舎から蒋介石の軍隊にとられて、台湾に渡ってきた外省人です。子どもが産めないで、養子をもって育てました。その養子の息子には結婚して子どもも生まれたのですが早くに亡くなり、嫁も出て行ってしまったので、2 人の孫は私たち夫婦が育てました。

■恥ずかしいのは私たちではない

1992 年に、台湾でも「慰安婦」の問題が公けになり、私も日本に行って裁判の原告になりました。何も知らない若い女の子をだまして連れて行った日本政府には責任があります。自分のことを恥ずかしいと思って生きてきましたが、同じ経験をした仲間たちに出会ってそうではないと気づきました、「恥ずかしいのはウチたちではない、恥ずかしいのは、何も知らない女の子をだまして連れて行った日本の方ではないか」と。

(2011 年 9 月 1 日逝去)



【被害者証言 1】万愛花（中国）（石田等編『黄土の村の性暴力』参照）

●1930 年、中国・内蒙古で生まれる

●連行年：1942 年 6 月・8 月・12 月（又は 1943 年 1 月） 連行先：中国山西省進圭社の日本軍の拠点

●証言概要：

■抗日の村で副村長になりました

1930 年、内蒙古で生まれた私は 4 歳の頃、「童養媳(トヤンシ)」として山西省孟県の羊泉村の貧しい家に買い取られました。・・・日本軍が山西省に侵入して私たちの地域でも抗日運動が始まり、羊泉村にも共産党系の民衆組織ができました。私はその一つの児童団に加わり、やがて婦女抗日救国会に入って、そのリーダーになりました。数え年 14 歳の時には共産黨員になって八路軍のために夢中で働きました。・・・

私の活動は評価されて、わずか 15 歳でしたが抗日の副村長に任命されました。そのために日本軍に捕まり、激しい拷問を受けることになりました。

■ひどい拷問と輪かんを受けても 黙秘しました

初めに捕まったのは 1942 年（あるいは 43 年）の 6 月半ば頃のことです。・・・2 回目はその年の 8 月頃、池で洗濯をしている時に捕まり、同じヤオトンに監禁されました。最初の夜は全裸にされて何人もの兵士に強かんされました。待っている兵士は、周りで笑いながらそれを見ていました。強かんの後は拷問です。私が黨員の名前を言わないので、ベルトや棒、銃の台尻などで殴り、意識を失うと水をかけて蘇生させ、拷問を繰り返しました。この時も監視の隙をつき、戸をこじ開けて逃げました。3 回目はその年の 12 月か翌年の正月です。村人たちと一緒に捕まって、また進圭社で監禁されました。ヤオトンは逃げられないように、窓も戸も塞がれていました。毎日の輪かんと拷問は、さらにひどいものでした。私は白状したところで殺されると思い、黙秘を続けました。すると彼らは私を庭の木に吊り下げて脇毛を抜き、銃床で殴り軍靴で蹴りました。指と指の間の関節がはずれ、肩の付け根や腿が骨折し、釘の付いた板で頭を殴られ、イヤリングごと耳たぶを引きちぎられました。水をたくさん飲ませられた後、棒で腹を押され、吐かされました。私は意識を失い、死んだと思われて、裸のまま冬の川辺に捨てられました。そこを一人の老人に助けられて、奇跡的に生き延びたのです。

■どんなに年老いても 日本政府と闘い続けます

命はとりとめたものの、私は長い間寝たきりになりました。体中を骨折し、骨盤がなくなって背丈が縮んでしまい、物につかまって歩けるまでに 2、3 年もかかりました。娘と一緒にあちこちの村を転々としながら裁縫の仕事や物乞いもしなければなりません。小さな娘は私の手を引いて歩き、身の回りの世話もしてくれて、本当に苦勞をかけました。拷問による後遺症は身体にあちこちに残って、今も私を苦しめています。太原に住むようになったのは 1959 年からでした。

中国人として世界に向けて初めて日本軍による性暴力被害を訴えたのは、1992 年の国際公聴会の時です。1996 年に再び日本で証言をした時、日本の友人たちに「日本政府を相手に裁判をしたい」と打ち明けました。1998 年に提訴。私が娘に自分の受けた被害について話したのは、1996 年になってからでした。娘は今でも私の傍を離れずにいてくれます。2000 年の女性国際戦犯法廷でも、原告として被害証言を行いました。私たちを「慰安婦」という言葉で呼ばれるのは我慢できません。私たちは日本軍の性暴力被害者なのです。

このところ病気が重くなって入退院を繰り返していますが、嬉しいのは日本の支援団体の皆さんの努力で私たちの闘いを伝えるパネル展が各地で開かれて、若い世代が訪ねてくれるようになったことです。私の病状が報道されると、ネットで知ったたくさんの人からカンパが寄せられるようになりました。仲間たちが高齢になって次々と亡くなっているのは辛くてたまりませんが、私はどんなに身体が弱ってもまだまだ闘い続けます。

(2013 年 9 月 4 日 逝去)